大分合同新聞社

大分今昔

渡辺克己著

第十五章●春日浦かいわい

Next

初版：2007 年 11 月 23 日発行

第十五章●春日浦かいわい
【写真】春日浦海岸（昭和初年）
・コウシ戸の家
・まつりのヤブサメ
・蓬莱山の履歴
・たなばた流し
・松林と豊久町
・賢女きせの碑
・神宮寺浦
・春日の森のカラス
・門前の文房具店
・工業学校生徒の実力
奥付け／デジタルブックについて

発刊に当たって

▽この電子ブック「大分今昔」は昭和 37（1962）年 11 月から翌 38（1963）年 12 月末まで、1 年 2 カ月にわたり大分合同新聞に 295 回連載され、連載から 20 年後の昭和 58（1983）年大分合同新聞文化センターで書籍として出版されたものを、電子ブックとして再編集したものです。したがって、文中の「現在」とか「いま」というのは昭和 37、8（1962 ～ 63）年当時のことです。

▽使われている町名も、その後、街区制の変更によって連載当時とは変わっており、その場所を知る手がかりになる建物も、いまでは移転したり、なくなったりしているものがあります。このため、おもなものは各章の終わりに「注」として、昭和 58（1983）年現在の町名、場所を説明し、わかりやすくしています。

春日浦海岸（昭和初年）

コウシ戸の家

堀川から住吉神社横の仙石橋を渡ると勢家。明治四十年に西大分町が大分町に合併したのだが、その西大分町は、仙石橋から向こう、勢家、駄ノ原、生石を一つにして独立していたのである。

西大分町最後の町長は安部甚三郎さん。甚三郎さんは若いころ東京に出て報知新聞の記者をし、大分に帰って豊州新報（大分合同の前身）の主筆で活躍したこともある文化人町長だった。西大分町が大分町に合併後、大分は市となり、その助役をしていた。のち請われて国東町長をし、さらに安岐町長を勤めているとき病死（昭和五年）した。

勢家は古い静かな二本の裏町だ。仙石橋からまっすぐに西応寺の横を王子町に抜ける町筋が勢家新道で、威徳寺の先を春日神社の境内に突き当たる町筋が勢家本町。藩政初期ごろの古地図をみると、城下町から西大分方面に行くのは、いまの勢家本町の道路が一本だけで、新道の方は、向こうに抜けていない。その後浜の市の繁栄などで、交通もひんぱんとなるにつれ、春日神社の境内に突き当たって曲がりくねって行く道では不便だというので、「新道」ができたのだろう。

このあたりは、戦災を部分的にしか受けていないので、古めかしい家がたくさん残っている。それらの家は、たいてい道路に面したへやいっぱいのコウシ（格子）をとりつけていて、明治が近々とある感じだ。

あのコウシは、日光をへやに取り入れるには不向きかもしれ

ないが、へやにいて、障子にコウシのしま模様がうつるのは悪くないものだ。あの町筋を歩いてコウシ造りの家をながめることに、郷愁を感じる初老以上の人は多かろう。あれは、明治か大正初年ごろにとりつけたものだ。ほとんど農家だったあの辺の家は、それ以前は腰戸の上に、あけたてできる障子を設けていたのである。

堀川から工業学校前を通って王子町に行く道路は、明治の中期にでき、それに電車軌道が走るようになったもので、あの道路ができるまでは、勢家新道は主要道路として人の往来がさかんだった。いまは裏町だが、どういうものか、トラックなどがいまなお盛んに通る。

昔のおもかげをそのままとどめて、ひっそりと息づいている細い裏町を、コウシ戸をうちふるわして軒すれすれに走るトラック。それはあのあたりの静かな空気をかき乱すちん入者だ。だいいち町のたたずまいにふさわしくない。「王子町方面から羽衣通りに抜ける近道なんでしょうね。こんな狭い道を通らなくても、といったら、市長さんにいってくれって、運転手さんがさかねじを食わすんですよ」

明治初年に建てたという古い家のおばさんが、困った顔をしてコウシ戸からのぞいていた。

勢家本町から勢家新道にぬける——いま勢家温泉のある路地から、さらに工業学校の方に伸びている細い路地のことを、もと「たごしゅうじ」と呼んでいた。

「肥えたご小路」のなまったものだ。工業学校あたりから向こうは広い田畑で、勢家の百姓がその田畑に肥えたごをかたげ

て行く通路になっていたのである。つまり肥えくさい路地であることを自他ともに認めていた。

まつりのヤブサメ

春日さまのお祭りの呼びものはなんといってもヤブサメ（流鏑馬）だ。いまも、どうやら例祭の儀式として存続しているが昔は盛んなものだった。

勢家本町のはしから、春日さまの鳥居のところまでの長い町筋の両側数カ所に、経木で作った的がさし出され、これを走る馬上からねらい打ちするのである。元来ヤブサメは騎射の一種で、馬上からカブラヤ（鏑矢）で的をいるものだが、ここのは変わっていてムチを振るって的をたたき落とすのである。たたき落とされた的の経木はばらばらになって見物人の頭上に降ってくる。それを見物人はあらそって拾った。家に持ち帰って、米俵にさしておくと虫よけになるといわれている。

騎手は水干にエボシ（烏帽子）それにたすき掛けという勇ましいいでたち。明治ごろまでは、これが十騎あまりも出場し、一騎駆け出すごとに、あの狭い町筋の軒下にひしめく見物人がワッと歓声を上げた。いつもは忘れられたようにひっそりとしている、あの町筋が、年一度だけ、ごったがえすにぎわいに、わきかえる日だった。

寛永十四年に府内城主日根野吉明が東国東郡竹田津村に住む井上右門を招いて騎手とし、ヤブサメを始めさせたというから長い伝統を持っているわけだ。この井上氏が代々勢家に居住し

て騎手をつとめる家柄となっていたという。いまも豊久（王子町一丁目）に井上姓の家があるそうだ。しかしその井上家も馬に乗り手がいなくなって明治ごろから別の人が騎手になっていた。現在は、もと軍人だった中島三条に住む後藤勇吉さんがつとめている。

馬は氏子や近在の、おもに農家から、すすんで差し出していたものだ。自分の家の役馬が神事に出場することは名誉だったのである。

春日さまのお祭りの特色の、もう一つはアラモノと農具の市がたつことだった。

「ショウケがだいぶん痛んできたけんど、春日さまのお祭りまで、もつじゃろうかなあ」

大正ごろのこどもは、祖母がそんなことをいっていたのをお

春日さま（挿絵：田中 昇）

ぼえているはずだ。家庭で使うアラモノや農耕用のスキ、クワは、春日さまのお祭りを待って買うのが、ふつうだったのである。

大正ごろまでは、参道や境内の広っぱにショウケ、フルイ、ミイ、飯びつをはじめあらゆるアラモノと、クワ、スキ、カマ、マサカリなどの農具の市がところせまくたっていたものだ。

昭和になってしだいにさびれ戦争とともにばったりなくなった。いまは、ほんの一、二軒、小屋がけの店の間にまじってアラモノの露店が出ることがある。そんなものでは昔の盛んなアラモノ市をしのぶことはとてもできない。

蓬莱山の履歴

春日神社の創建は、神いんひょうびょうとしてさだかでない。天平年中（七二九年―七四八年）または貞観二年（八六〇年）に、ときの豊後国司が奈良の春日神を勧請したと伝えられている、というていどだ。とにかく大分市内では最も古い大社の一つにかぞえられている。

豊後国守護として府内にはいった大友能直は神殿を再建しその子親秀も造営したり社領を寄進したり手厚い崇敬を示している。このとき寄進した社領は相撲田、瑞垣（みずがき）田、菖蒲田などの名があったそうで、いまも勢家と春日町とに菖蒲田の小字名が残っている。

境内の蓬莱山は、親秀が大友氏の繁栄を祈って築いたものであるといわれているが、最初に築かせた者はだれかはっきりし

ていない。蓬莱山もまた神社とともに歴史のかなたにかすんでいるわけだ。ところが竹中重隆が府内城を大増築したさい、加藤清正が来遊してこの蓬莱山にのぼり、山上から城内がうかがえるのは不利益だと、重隆にすすめて取りこわさせた。重隆は領民の信仰や影響を考えて、まず庄の原に丘を築いて蓬莱山と名づけたのち、春日社の方を取りのぞいたといわれている。その後、日根野吉明が、蓬莱山を再建し「過去七仏」のびょう（廟）を建立した。

これは正保二年（一六四五年）のことである。この「過去七仏」は、蓬莱山の西側に小さな丘か七つあったらしいが、明治年代にはなくなっていた。

吉明は人心収らん（攬）の術に長じた名君だったことは、彼のかずかずの事績が語っているとおりで蓬莱山再建のさいも自らモッコをかついで、出役の民を激励したと伝えられている。

現在の蓬莱山は、もとの位置よりやや南方に動いている。昭和十二年、忠魂碑に近すぎるというので「山移し」をやったのである。もとの位置は、いまの池のあたりが中心だったようだ。

明治年代は市内の小学校などの連合運動会が春日公園で盛んに催されている。そのさいも、蓬莱山は楽しいいこいの場だった。

蓬莱山の横に記念碑がある。これは日根野吉明が再建したさいに建てたもので、同慈寺の鶴翁という人が碑文を書いている。「豊州府春日原の蓬莱は、上古からあったものだが中ごろある人がこれをこわした。寛永十一年日根野織部正藤原朝臣吉明が、さいわいに征夷大将軍の命を受けてこの地を領し…」原文は漢

文だが、このような調子で、蓬莱を再建したいわれを細かに記している。

先日、蓬莱山の上にのぼってみた。付近のこどもたちが、駆けのぼり、駆けくだって遊んでいた。いい遊び場でけっこうだが、そのため芝草も踏み荒らされている。南側の芝草はかたわらの木の陰になっているので、ほとんど枯れて土がむきだしになっていた。芝草が枯れたら土が流れて、ますます小さくなるだろう。大分市にとっては、大切な遺跡であり、なつかしい丘だ。大切にしたいものだ。

たなばた流し

春日公園や春日浦一帯に群生している古松は大分っ子にとっては忘れられないものの一つだ。

大正十年に電車軌道を敷くために海浜を埋めて道路ができるまでは、あの松林のすぐ下を美しい波が洗っていた。

松林の中で裸になって、ぱっと飛びだせば、波打ちぎわがそこにあったのだ。遠浅で、海水は澄み、砂もきれいだった。だから市民の海水浴といえば春日浦にきまっていた。

もう一つ春日浦で忘れられないのは、たなばた祭りのこと。ササ飾りを軒ごとにかかげたその夜、市内のこどもたちは、軒からササ飾りをとりはずし、これに美しいちょうちんなどをつけ、「ホーライエンヤ、エンヤサノサッサ」と口々に叫びながら市内を夜っぴてにぎやかに練り歩き、夜明け前に、春日浦に持っていって海に流すのである。

そのとき、浜に線香を売る店が出た。こどもたちはこれを買って楽しむのだ。火をつけた線香を一本一本海浜の砂上につきさして「七夕」や「天の川」の字を描くのである。小さな火だが、それが無数に集まった「七夕」や「天の川」の字が、海浜を埋めつくし、やみの中に浮きあがって、ゆらゆらと煙をあげているさまは、夢のように美しいものだった。

この夜はまた大分の盆踊りの先がけの日だった。市内の青年男女は夕方六時ごろから柞原さまにお参りをしてここで踊ってから春日浦にくだった。春日浦に到着するのが午前二時ごろだ。それから朝まで踊りぬくならわしである。集まった青年たちの、だれということもなく盆踊り歌がうたい出される。

「ソレソレ、アトヤンソレサア」のおんどとともに、さまざまのくどきが口をついて出る。

「恋は都の花と散りゆく　ア、ヨイショ
　涙でそでをぬれぎぬの　アトヤンソレサア」

などの、おさん六三郎心中ものは、とくに人気があった。

このくどきにのって、手拍子を合わせて踊りの輪が、松林の中や海浜にひろがってゆくのだった。線香の「七夕」の字が消え、いそに寄せる波に夜明けの光りがさすまで踊りぬいて家路につく。この夜、春日浦で咲く恋の花もいくつかあった。市内の盆踊りは、この夜を皮切りに開始されるのである。

春日浦の、たなばたのササ飾り流しがさびれたのは、大正四年に大分築港が完成してからだった。ササを流す場所が築港のうちにはいったため、潮がササを沖に持ってゆかなくなったのだ。浜に打ちあげられたササの山は、みぐるしいし、始末に困

るというので、築港内のササ流しを、おかみ（役所）から止められたのである。

盆踊りは、その後も続けられたようだが、夢のような、たなばた流しの情ちょの中でこそ楽しいものだ。それに電車軌道が走って海浜も遠のくにつれ、いつとはなくやまってしまった。

松林と豊久町

蓬莱公園北に見て
　ここには春日の社あり
第一森林奥深く
　海にのぞんでクラブあり
県下に名を経し師範校
　敷き地は広く堂々と…

堀川の項で紹介した「堀川名物まんじゅうで…」の堀川をうたった文句の次に続く歌だと、魚町の人が知らせてくれた。

この春日の社の森林、古松群を造成した最初の人は府内藩主竹中重利である。慶長十二年九月、江戸参勤の帰途、播磨灘で風波にあって遭難しかけた。このとき、はるかに勢家の春日宮に海路安全を祈ったおかげで無事沖の浜に帰ることができた。そこで重利は、沖の浜からただちに春日宮に参拝して、帰城したが、そのお礼にと十万本の松を寄進し、春日宮の境内に植えさせた。

境内といってもいまのようなものではない。相当広い地域にわたっていただろう。春日浦を電車で行くと、南側の道路ぞい

に松林が続いている。あれが、すべて竹中重利の造成になるものである。もちろん、後世植えついだものもあるが、見上げるような老木は、重利の植えさせたものと思ってよい。

明治初年ごろまでは、毎年正月十六日の山の神の祭りの日に、勢家、駄ノ原、生石の村民が山に行って、山の神にお祈りをして一人一本ずつ松の若木をもらい、それを春日浦に植え継いでいたということだ。それほどあの松林の恩を感じ大切にしていたのである。だから、明治年代までは、春日浦の松林はずいぶん見事なものが、海岸の白砂に影を落としていたのだが、しだいに枯れて切り倒されていったのだ。いまマツクイムシがはびこって老松を枯死させつつあるそうだが、あれを全滅させたら、先祖にたいして申しわけがたつまい。

あの松林のはしに「豊久風致地区」という棒ぐいが立っている。いまは町名として残っていない地名だが、もともと春日神社から西の方の一画の地名だった。

日根野吉明が正保二年に蓬莱山を再建した年の春日社の祭礼の日をぼくして、駄ノ原や近村の希望者に、蓬莱山の西方に民屋を建てさせ、勢家の民屋と接続させた。そして新しい町を豊久町と名づけたとある。現在の王子町一丁目付近である。

歌の文句の「海にのぞんでクラブあり」のクラブは、現在の春日亭である。明治年代は大分の最高級の料亭だったらしい。あの料亭の建築はちょっと他にまねのできない総ケヤキ作りだそうだ。最初「蓬莱館」と称していたが、新京楼の経営に移ってから「大分クラブ」と呼んだ。春日亭というのは、そのころ大分クラブの東側に小さな料亭としてあった。

瓜生鉄雄さん（威徳寺住職・歌人）が西大分小学校（いまの王子神社境内にあった）に通学するとき大分クラブにずうっと横づけされた自動車を見て、駆け出して行ってながめた。自動車というものを見たのは、そのときが初めてだったそうである。

この大分クラブのすぐ後ろが海浜だったのだから、すごく見晴らしのいい料亭だっただろう。

賢女きせの碑

春日公園の西のすみに「賢女起世之碑」がある。起世（甲斐きせ）は、貞節のほまれ高く弘化四年に時の藩主は八十八歳以上の例に準じて特別の待遇を与え、終生の扶持（ふち）をさずけるとともに毎年正月には城中に呼び出して酒さかなをたまわったといわれる。

顕彰碑を建てたのは明治十三年、大分町の有志がきせの徳行を永久にたたえるために、藩の賞辞をもとにして碑文を刻んだ。題字は、時の太政大臣三条実美の筆である。

きせは元町の生まれで、幼時に両親を失い、奉公などをしたのち十九歳で笠和町に嫁入りした。ところが間もなく夫は不治の難病となり、きせが病夫としゅうとめをかかえて生活しなければならなくなった。「夫の病気しだいにさし重り自由かなわず一間に引きこもり打ちふし、気うつ致すべしと、手業のひまには背負いて屋敷内をはいかいし、あるいは手足冷え候時は肌にて暖め…」（藩行賞覚書）という貞女ぶりで、数年後に夫に死別すると、しゅうとめにつかえ、さらに亡母がしばらく連れ

添ったことのある老人まで養うという、男手もかなわぬ働きぶりで、これら老人たちも死去すると「墓参おこたりなく、夏分は蚊を防ぎ候とて、実父母ならびに前記三人の位はいを蚊帳の中に入れ暑さたえがたきときはうちわにてあおぎ、寒夜にはふところに入れ、在世にて仕え候時の如くして……」やもめ暮らしをおし通したというのである。

きせは明治二年八十歳で死亡した。碑文には「きせは君子の行四あり。姑につかへて順孝なり、究阨（きゅうやく＝困苦のこと）に志を守る貞女なり、人の恵を忘れず義なり、一介も取らず廉なり」とたたえている。

とにかく、まれにみる婦女子のかがみであると、当時は府内の人々の非常な感動を呼び起こした。藩主の耳に達すると、領内の手本であるばかりでなく、他領にも自慢できる婦人であると、大いに満足しその行ないを領内にふれ知らせたというから、きせの行状は、修身教科書そのもののようなりっぱなものだったにちがいない。

当節の若い婦人に批判させたら「自分の幸福を犠牲にしてなんの生きがいがあるの。ことに位はいをカヤの中に入れるなんて、バカじゃなかろうか」ということになった。

バカはきせ女にたいして失礼だが、こういう貞節な婦人にたいして、日本の男性は郷愁を持っていることは事実だ。

昭和の初めに水道が市内に敷設されたとき、水道を市民に宣伝しようというので、唯一の公園である春日浦の蓬莱山北側に池を掘り、噴水を設けた。このとき、きせの碑を西に数間移動させたのが現在の位置である。

神宮寺浦

春日浦は、大友宗麟が南蛮文化を取り入れた玄関口神宮寺浦だと市民は信じている。電車道に面して南蛮の服装した宗麟像が天の一角をにらんで立っているのも神宮寺浦の歴史を語る記念像なのだ。ところが、最近の郷土史家の研究では春日浦貿易場説が少々あやしくなってきている。

春日神社に神宮寺が併設されていたのは事実で、一時は相当広い寺領を持っていたことは記録にもとどめている。西は駄ノ原の春日原（いまの王子町二丁目辺）東はいまの工業学校付近まで寺領を広げていたらしい。しかしそれは、もっと規模の大きい春日神社の中の神宮寺だったことには変わりはない。だから、あの一帯を称するとき春日浦と呼んでも神宮寺浦と呼ぶのはおかしいというのが一つの理由。

もう一つは春日浦は、もともとずいぶん遠浅の海で、しかも北風の強いところだから、貿易場として外国船が停泊するには適していない。とすると、貿易場である神宮寺浦は、春日浦でない他の適地ではなかったか、というのである。

天文二十年（一五五一年）にフェルナン・メンデス・ピットが府内にきたときには日出沖にいかりをおろしているし、同じ年にザビエルが山口から府内にきたさいも、日出に上陸して陸路をとっている。このように、ポルトガル船はたいてい日出沖に停泊している。当時の貿易は府内、日出沖、臼杵などが最も盛んであったといわれているが「府内と日出とは貿易場と外港の関係にあったと思われる。この日出沖と神宮寺浦とがどのよ

うな関係にあったか現在のところわからないが、神宮寺浦と春日浦と同一の地であるかどうかは大いに問題がある」と大分市史（昭和三十年刊）は述べている。

宗麟が鉄砲を多量に買い入れたり、海外の文化を移入した開港場「神宮寺浦」は大分市の歴史ときってもきれない因縁がある。その位置がぐらついているのだから、史家は大いに究明してくれないとこまる。

春日神社の神宮寺は、明治初年に廃寺となっているが、いま児童養護施設青松園の建っている位置がその寺跡だという。戦前まで庵寺があったが、戦後そのあき地に野田興順さんがバラックを建てて大分別府の焼けあとから拾ってきた浮浪児を収容し、春日園と名づけたのが施設の始まりであった。春日園は放縦な経営のため閉鎖に追い込まれ、そのあとを故矢野六七吉さんが引き継いで「青松園」の名で再出発したのである。

ところで、代々神宮寺住職であった寒田家の直系が、現在児童養護施設わかば園の園長をしている長谷清彦さんである。神宮寺と児童養護施設、なんと縁の深いことだろう。

春日の森のカラス

春日浦と男子師範学校。戦中、戦前派の先生には忘れがたい思い出がふんだんにある。

いまの県営球場の敷き地全部が師範学校の校地だった。明治三十一年に師範学校が新築されるまではあのあたり一帯は松林背後地の畑だった。浜田と呼んでいた土地で昔は水田だったも

のらしい。だいたい勢家、王子町は市内の田畑の北端だ。やはり初瀬井路の恩恵を受けていたのだが、井路の終着点だからじゅうぶんな水が注がれるというわけにはいかなかったとみえ、至るところに、タメ池が掘ってあった。一方に石をくくりつけてある「はねつるべ」を上げ下げして、炎天下に焼けついた田に水をかい込むのは、おもに女の仕事だった。たいへんな重労働だが働きもののあの付近の婦人は、それによく耐えてきた。

師範と大分中学は、大手通りにいっしょにいるころから仲が悪く、ことごとに対抗意識を燃やしていた。野球にかぎらず陸上競技でも、対抗戦をやっていたが、試合のあとは負けた方が腹いせにケンカをしかけるのが普通だった。とくに大中生の方がケンカには積極的だ。長距離の優勝戦を師範の校庭でやって、大中が負けたので、大中応援団が師範の門前に待ちぶせてケンカをぶっぱじめたということも明治年代にすでにあった。野球に負けて応援団がゲタばき、むしろ旗を押し立てて師範の寄宿舎になぐり込みをかけたこともあったそうだ。

師範生の服装は官給で、冬は黒服に黒

師範学校

ボタンの黒ずくめ、夏は真っ白の服だった。師範生は、この黒ボタンが気にくわなかった。金ボタンにしてほしいと交渉して、同盟休校をやったこともあると、首藤敬太さん（現在大分洋裁授産所長）が話していた。

師範生のストライキは、たいてい柞原八幡か大道の青島神社にたてこもった。大分中学は上野の山か松栄山、大分川原にたてこもるのが普通だったようだ。

もちろん、ボタン騒動は生徒の負けで、相変わらず黒服、黒ボタンは続いた。

春日の森からノーエ
　春日のサイサイ森から
師範学校みれば
　師範学校みれば
カラスのやつらがノーエ
　カラスのサイサイやつらが
麦飯食いよった
　麦飯食いよった

大分中学生が、ノーエ節で師範生をひやかした文句である。カラスは黒ずくめの服装をいったもの。師範寄宿舎では麦飯がきまりだったのである。この歌にたいして師範生も負けてはいない。こうやりかえしている。

上野の丘からノーエ
　上野のサイサイ丘から
中学校をみれば
　中学校をみれば
青筋やつらがノーエ
　青筋サイサイやつらが
けんかをしよった

青筋は大中の象徴であった帽子の青線、けんか早いのは大中生気質だったのである。

余談だが、師範学校の麦飯の残飯をドンブリ一杯一銭で売っていた。駄ノ原、勢家、浜町あたりの貧しい人が、これを寄宿舎の台所にこっそり買いに行った。この一銭のドンブリ飯がどれほど人助けになったかわからない。

門前の文房具店

師範学校の正門は南向きで、王子町二丁目筋から正門に向かって校道があり、その両側はサクラの並み木だった。校庭の周囲もサクラが多く植わっていたので同窓会に「桜庭会」という名をつけていた。

この正門前に福田馬太郎さんが船頭町から分家してきて文房具店を出していた。馬太郎さんは師範生をかわいがっていたので、みんなから慕われていた。店には文房具のほかにマンジュウを置いてあったが、腹をすかせた寄宿舎の生徒が飛びこんでくると、二階に上がらせて食べさせた。おばさんのおわんさんが茶を運んでくれたり、ときには生徒の話し相手になって「ええ先生になっておくれ」と励ましてくれた。

この福田文房具店のむすこがいま日本画壇の最高峰にある福田平八郎さんである。

平八郎さんは師範の付属小学校に通っていたが、勉強はしないで絵ばかりかいていた。その画才を発見したのは師範の絵の先生をしていた首藤積さんで、馬太郎さん夫妻に「この子は絵

の方に進ませなさい」と、すすめたという。首藤先生は直接平八郎さんに絵の指導はしなかったようだが、画家平八郎への進路に大きな影響を与えた人だった。

いま学芸学部の門内にある牧源太郎先生の碑は、もと師範学校の門のわきに立っていたものである。

牧源太郎先生は塩九升町の人で市内の訓導を勤めたのち大分高等小学校（現金池校）の二代目校長をちょっとやり、付属訓導に移って明治四十四年に死亡するときは付属の首席訓導であった。

まことにぼくとつな容姿の先生で、口の中でものをいうようなひかえ目なところがあり、朝礼の訓示には、話しべたなので手をもみながらやるといったようなところがあった。

それだけに生徒からは慕われ同僚や後輩の尊敬を集めていたが、上司からうとんぜられがちで、晩年は精神的には幸福ではなかったようだという。死後、辻英俊さんなど、同僚や後輩で先生の徳を慕う人たちが発起人となって県下に呼びかけ、四十五年に記念碑を建立したのである。碑文は、時の師範学校校長峯是三郎さんが書いた。

戦後、戦災を受けた師範の校地は県営球場に変わり、師範は学芸学部となって、解散した連隊跡に移った。牧源太郎碑だけが球場のへいの外にぽつんと置き忘れられていた。これを見かねた矢野孝吉さんや吉田地平さんなど県教育界の大先輩が何とかしなければと呼びかけたが実現をみず故人となり、その遺志を継いだ首藤敬太さん（元中島小学校長）が中心となって県下にゲキをとばし、師範同窓会事業として昭和三十三年にようや

く学芸学部に移転した。

あの碑は牧源太郎碑というより、大分県の教育者の友情と教育者精神を象徴する碑といった方がよさそうだ。

工業学校生徒の実力

大分工業学校（当時は工業徒弟学校）があそこに移ってきたのは大正四年。それまでは別府浜脇にあった。

工業徒弟学校の創立は明治三十五年。そのころは別府町と浜脇町の合併前で、両町組合立として設立されたのだった。初代校長は日田の人で長尾薫という人。おもに別府みやげ品の技術者を養成することを目的としていたようだ。だから最初はさし物、うるし塗り、まき絵、竹かごなどを教えていた。

三十九年に別府、浜脇が合併して工業徒弟学校も町立となり、さらに四十三年に県立に移管した。

そのころ宇佐神宮の社殿の塗りかえを頼まれて、ほとんど生徒の手で仕上げたことがあった。足場を組んでする大工事だったが学校の名誉にかけてりっぱに完成したのだからたいしたものだ。

生徒の作品は、共進会や博覧会に出品されて賞を受けることもたびたびだった。明治四十三年には日済英同盟博覧会には全国各種学校の代表として出品し、名誉大賞を受けているし、大正四年にはサンフランシスコ万国博覧会で一等賞金牌を受けている。当時の生徒は、一人前以上の仕事をやっていたのである。

大分市に移転したいきさつはおもしろい。

そのころ、現在の工業高校のところは、市民の共同墓地を整理して「大分県物産陳列所」が建っていた。ところが陳列所の内容は貧弱だし参観者も少なくて、せっかくの施設が用をなしていない。そこで高山英明さんや、山田耕平さんらが「大分の物産陳列所と、別府の工業徒弟学校を交換したらどうだ」といいだし、このふたりがおもになって県に陳情し、黒金知事を動かして実現させたのだった。これが大正四年の十二月だったが、学校が移ってくる前の十一月に、大分における物産陳列所の最後の花を咲かせるにぎわいがあった。

大分築港落成記念の大分県物産共進会が催され、陳列所が主会場になったのである。この共進会に馬上金山の成清博愛さんが、純金の大黒さんを出品し大いに話題となった。

学校はさし当たって陳列所だった建て物をそっくり使うからいいが、生徒の寄宿舎がない。そこで移転前に生徒が乗り込んで、実習ということで寄宿舎を新築している。

大正七年に、それまで乙種の学校だったのを甲種に昇格し、徒弟の字を除いて県立工業学校となったが、この昇格も高山英明さんらの運動によるものだった。その理由は「乙種の学校では、生徒の徴兵猶予をしてもらえない」ということだったそうだ。このときから白線の帽子に白いきゃはんの工業の制服が生まれた。当時、春日神社の前にタイ焼き屋があった。シッポのところまでアンコがはいっている。あのホコホコと湯気のたつ一個二銭のタイ焼きは、食いざかりの工業生にとって魅力で、教師の目をぬすんでは買い食いをした思い出を、あのころの生徒はみんな持っているはずだ。

オオイタデジタルブック

オオイタデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたいと願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「大分今昔」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！！

大分合同新聞社　NAN-NAN　別府大学

著者略歴◇渡辺 克己

大分県大分市佐賀関町木佐上出身。大正二年生まれ。朝鮮京城で新聞記者。終戦で引き揚げ、大分合同新聞記者。こども新聞、学芸部等の部長を経て調査部長を最後に昭和四十三年定年退職。昭和二十七年から同四十三年まで大分市教育委員、昭和四十三年から同四十八年まで民生児童委員。

郷土史を研究し「大分今昔」「豊後のまがい物散歩」「国東古寺巡礼」「忠直卿狂乱始末」「真説・山弥長者」「豊後の武将と合戦」「ふるさとの野の仏たち」等の著書。

デジタルブック版「大分今昔」　第十五章 ●春日浦かいわい

2007 年 11 月 23 日初版発行

筆者　渡辺 克己

挿絵　田中 昇　（着色：佐藤 克治）

編集　大分合同新聞社

制作　川村正敏／別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行　NAN-NAN 事務局

〒 870-8605 大分市府内町 3-9-15 大分合同新聞社 総合企画部内

© 大分合同新聞社